

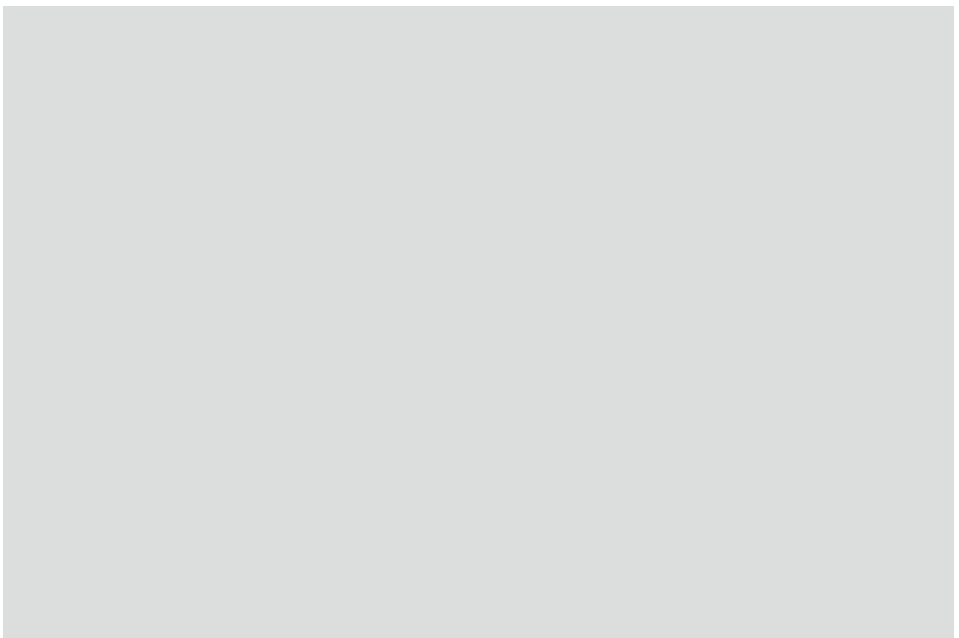
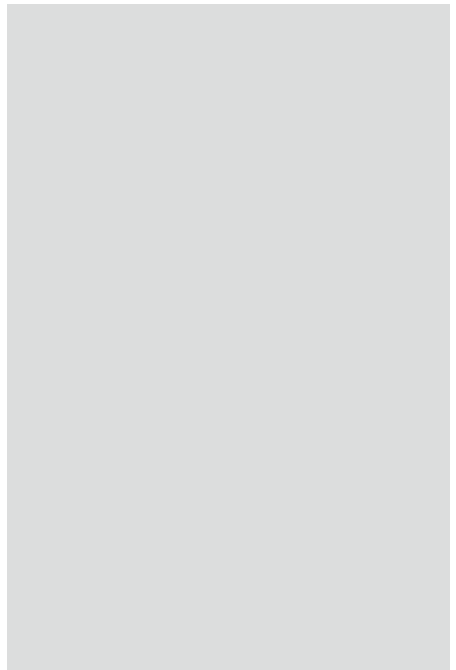
終える命

つなぐいのち

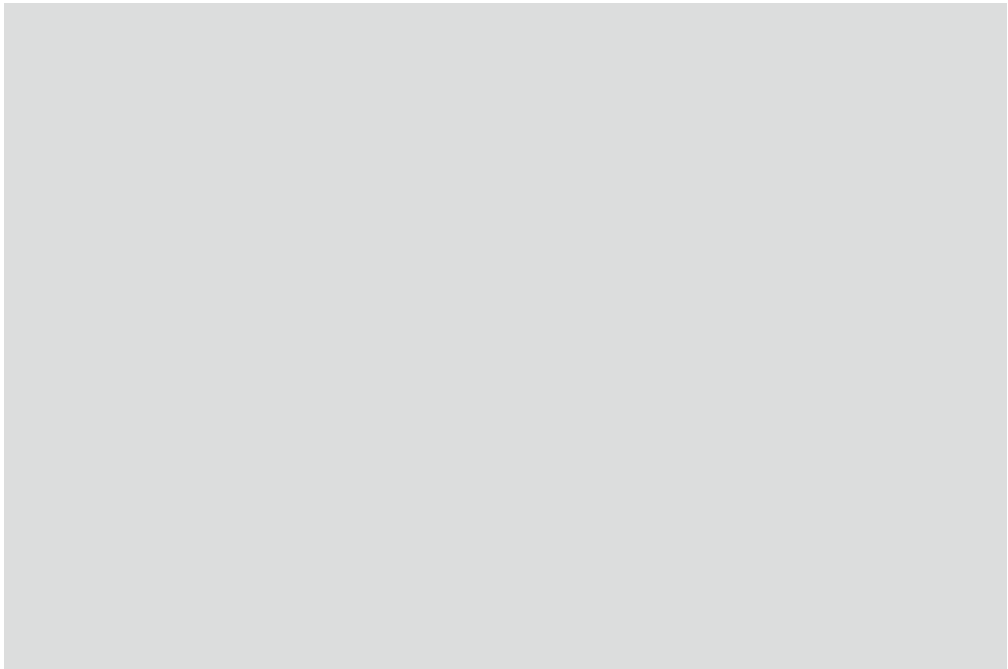
國
森
康
弘

第4回 ふたつの大舞台

※本連載は、本文のみ無料でお読みいただけます。
写真は、冊子版でのみご覧いただけます。



バイタルサインの数値だけでなく、全身で発する気や
空気感を通じて体調をみて、想いを汲む。



年を重ねるごとに、生きぬく力を内に蓄えていく。

ま

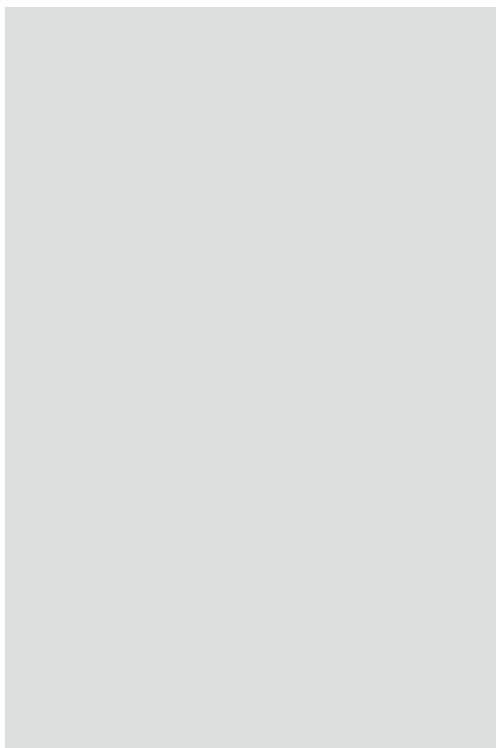
んまるな目玉がふたつ、ゆつくりと天を仰ぎ見る。部屋には、目には見えないが、何だかあたたかですっきりとした空気がじんわり、流れていた。重症心身障がい有する人たちがおおい暮らすびわこ学園。そこなるみさんに出会った日、曾祖母のひでさんの話をしたときのことだ。

ひでさんは、数年前に亡くなった。生前にご縁をいただいて、笑顔の写真を撮らせてもらったことがある。当時、御年98歳。寝たきりになるまでは、4世代で暮らす自宅で、脊髄小脳変性症という進行性の難病を抱えるひ孫・なるみさんの身のまわりのことを、日々、ひでさんが面倒みていた。

優しさと、そして刻んできた年の重さがにじみ出る素敵な笑顔を撮った何日かあと、ひでさんは危篤になった。なぜだろう、時を合わせるかのようになるみさんも容態が急変して意識不明になり、救急搬送されていった。

その数日後、ひでさんは穏やかに息を引き取る。安らかな「寝顔」だった。同じ頃、病院から連絡が入った。なるみさんは命を取り留めました、と。

「きつと、ひでばあちゃんになるちゃんに、生きる力を渡していったくれたんやわ」。2人の様子を見て、



家族は思った。ご先祖様から代々受け継いで、ご自身でも98年、内に蓄えてきた生き抜く力を、愛情を込めてなるみさんに手渡して、逝った。「あんたはきはって、もつと長生きせなあかんで」って。

いのちをつなぐ——。この壮大なバトンリレーは、個として、また総体として、ずっとなつと昔から、脈々と受け継がれてきた。

その大舞台が、ふたつ。ひでさんのような旅立ちと、そして出産だろう。あたたかな看取りの場には、悲しみのなかにも、どこかぬくもりのある空気が満ちていた。もつと言えば、生命力、命のほとばしりのようなものを感じた。

立ち会わせていただいた数々のお産の場にも、エネルギーの高まり、生命感のみなぎりがあった。死と誕生を通じて、いろいろありながらも、みんなでのちをつないでいく。そんな命がけの大舞台を、大切に営んでいければ……。

なるみさんはその後、人工呼吸器をつけてびわこ学園に入った。「ひでおばあちゃん、花が咲くような笑顔やったね」と話しかけると、なるみさんは全身で返事をくれた。

〈滋賀県にて2010・2013年撮影〉

くにもりやすひろ●写真家。イラク戦争を機に新聞社から独立し、紛争地や貧困地域などの現実を伝えてきた。2008年から日本の「在宅看取り」の現場を撮り始める。写真絵本『いのちつぐ「みとりびと」』シリーズ（農文協）ほか。